

全国青少年体験活動推進フォーラム

報告書

－withコロナ時代における体験活動の質の高め方－



事業の概要

【事業名】 全国青少年体験活動推進フォーラム

－withコロナ時代における体験活動の質の高め方－

【開催日時】 令和3年11月6日(土) 10:30～15:00

【会場】 国立妙高青少年自然の家(一部オンライン配信)

【主催】 独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立妙高青少年自然の家

【後援】 新潟県教育委員会、妙高市教育委員会、上越市教育委員会、糸魚川市教育委員会

【趣旨】 子供の健やかな成長のためには、自然体験活動や社会体験活動等を含め、多様な体験活動の機会を充実させることの必要性が求められている。しかしながら、新型コロナウイルス感染症の影響で、子供たちに十分な体験活動を提供できていない現状がある。そのため、発達段階に応じた体験活動の重要性について、理解を深めるとともに、新型コロナウイルス感染症流行下での体験活動の実践について検討し、全国に普及啓発する機会とする。

【対象】 青少年教育指導者、教員、学生、教育関係者、幼稚園教諭・保育教諭・保育士、体験活動に興味がある者、企業でCSR活動を実践している者、体験活動の指導者・指導者を目指す者等

【参加者】 108名

日程と内容

- ▶ 10:15～10:30 …… 開会式
開会のあいさつ 国立妙高青少年自然の家所長
- ▶ 10:30～12:00 …… 鼎談「体験活動のススメーwithコロナ時代における体験活動の質の高め方ー」
講師：明石 要一(千葉敬愛短期大学学長)
近藤 真司(一般財団法人日本青年館公益事業部「社会教育」編集長)
平野 有海(気象予報士)
- ▶ 13:00～14:30 …… 分科会
第1分科会 幼児期の自然とのふれあい・遊び・体験と学びの接続
第2分科会 小中学生期の自然や人との関わり方
第3分科会 青年期における社会とのつながりー想いをカタチにする方法ー
第4分科会 企業による学びの応援ー子供たちの未来のためにー
- ▶ 14:40～15:00 …… 閉会式
分科会からの報告 各分科会コーディネーター
全体講評 推進委員長 明石 要一
閉会のあいさつ 国立妙高青少年自然の家所長



体験活動のススメ

—withコロナ時代における体験活動の質の高め方—

【講師】 明石 要一(千葉敬愛短期大学 学長)

近藤 真司(一般財団法人日本青年館公益事業部「社会教育」編集長)

平野 有海(気象予報士)

近藤: 平野さんの幼少時代は、どのようなものでしたか。

平野: 幼少期は、福島県に住んでいて、小学校までは歩いて2kmあった。周りは、田んぼや畑、山や川に囲まれていて、公園などがあるわけではないので、何か遊ぼうとしたら、自分たちで考えて遊んでいた。春は、田んぼのあぜ道で食べられる野草を探した。夏は、雷雨が多く、黒い雲が出てくると、近所の人が「うちで雨宿りしていきな」と声をかけてくれたり、「木の下は雷が落ちるから危ないよ」と教えてもらったりした。秋には、桑の実を採りに山に入ったが、熊が出ると危ないので、みんなで大きな声を出しながら山に入ったりと、日常生活が、自然の中であって、そこから五感で感じたり学んだりすることが多かったです。



近藤: 「道草」から、いろいろ学んだんですね。

明石: 今の子どもたちも、道草が減っている。道草文化を地域でいかに保障をしていくかを考えることが必要ですよ。現在は、そもそも子どもたちの人口密度が減っている。学校以外で、意図的に子どもたちが集まって遊ぶためには、年中行事が効果的なんだと思っている。

近藤: 幼稚園や保育園では、季節の行事があるが、小学校に上がるとそのような行事をしなくなる。地域の行事として、お祭りなど実施しているが、担い手がいなくなっている。神輿を担ぐなど、表に出る人たちはいるが、その人たちを後方で支援する人たちが減ってお祭りもできなくなる。そうなると、意図的に後方支援も集まるようにしていかないと、地域行事がなくなってしまう。

平野: 今の子どもたちは、地域で行事をやっていないのですか。コロナの影響ですか。

明石: 私の住んでいる千葉県でも、行事の数が減っている。お祭りは、段取りが大変で、学校のグラウンドで地域の人も入って何かをするとか、地域食材を使って地産地消の行事を行うなどの新しいお祭りの形をつくっていくことが大事になる。以前、年中行事への参加についての調査を実施したことがあるが、15歳までにたくさんの年中行事を体験したことがある子供ほど、進学校に進学していた。幼児期は、幼稚園や保育園でみんなが年中行事を体験しているが、学齢期になると家庭による経済格差も影響してくる。そこを学校の先生方に理解してもらい、もっと体験をさせてほしい。



■近藤: ハロウィンもそうですね。変身をして、おかしを配ることが、商店街の活性化にも繋がっている。商店街の中に、ミッションとパッションを持っている人がやっていて、それを他の人にも伝承する仕組みを計画的に準備することはできるのではないかな。

■平野: ハロウィンのときに、息子が知らない人の家を訪問して、お菓子をもらうという経験をしました。今は、「うちに来ていいですよ。お菓子を準備して待っています」というのを、Googleマップにパンプキンのマークにして表示しているんですね。その家を訪問すると、仮装した人が出てきて、子供にお菓子をくださるんです。ITを活用することで、このような体験ができるのは、ハロウィンだけでなく災害時などにも、「うちで避難者を受け入れられますよ」というような活用ができるし、それが社会教育につながりますよね。

■近藤: 平成8年の中央教育審議会の答申の中に、提案として地域教育活性化センターをつくらうというのがあった。学校や公民館、図書館、自然の家など、それぞれの施設だけで事業を実施するだけでなく、お互いを知り、お互いができることを実施することで、それぞれがつながり、チームづくりをするコーディネーションが質の向上につながるのではないかな。



■平野: そこもパンプキン! 地域のここならこんな楽しいことができる。例えば、私の家に来てくれたら雲をつくる実験ができますよとか。そのような地域コミュニティができるとうい。

■明石: コロナ禍もライフパニックである。大学ではオンライン授業が始まり、学校教育でもICTの導入が進んでいるが、社会教育でも取り入れたらどうか。ライブ中継など同時多発的に行う体験活動等を検討してほしい。

■平野: 社会教育って地域コミュニティにつながるし、災害時にはその地域コミュニティが重要になってくる。平常時に社会教育を通じて、基盤をつくっておくのは、災害時にとても役に立つと思います。

■近藤: 最後のまとめをお二人からお願いします。

■明石: 1つは、文科省が個別最適な学びと協働的な学びを推奨しているが、先生方は対応できるのか。学びを遊びと置き換えると、それはまさに社会教育になる。みんなで一緒に遊ぼう! もいいが、個人で遊びたい子供もいる。その遊びの中から、様々な体験をすることで、工夫をし、試行錯誤しながら子供が遊びを考案することが大事。それが、個別最適な学びにつながる。2つめは、学校教育では、読み書きそろばんを学ばが、話す力や聞く力は社会教育で学ぶ。読み書きそろばんは、教えることができるが、話す力と聞く力は教えられない。話す力と聞く力は、決断力である。能力は教えられるが、才能は教えられない。ITや人工知能は教えることができるが、社会教育は教えられない。社会教育の道では、教えられないことがたくさんある中で、話す力と聞く力を伸ばして欲しい。

■平野: 気象予報士の勉強をしていく中で、物理学とか化学とか机上で考えるととても難しいことがたくさんあった。辛くなったときに、例えば、「質量保存の法則って、山にいくとポテトチップスがパンパンになるあれだ!」って思えると楽しく感じることもあった。物理や化学の難しいところが、実生活や実体験につながって自分の中に落とし込むことができるのが野外活動の魅力だと思う。その活動の火が途切れないうようになっていくといいなと思っています。

■近藤: 理科のことは社会教育で取り上げてこなかったのですが、生活と密着したことの学びも青少年教育、社会教育で必要ですね。長時間にわたり、話が広がりました。話を聞いて気付いたことや考えたことを事務局にも知らせたいだったり、午後の分科会につながりしてほしいです。ありがとうございました。

鼎談の様子は、こちらからご覧いただけます
<https://youtu.be/yUKnneDWCT0>



幼児期の自然とのふれあい・遊び・体験と学びの接続

【コーディネーター】小菅 江美(NPO法人緑とくらしの学校 理事長)

【事例発表】塩原 基寧(国立赤城青少年交流の家 主任企画指導専門職)

笠原 千鶴留(ときわ保育園 園長)

1. 事例発表

(1) 「ササビー広場で遊ぼう～国立赤城の実践事例～」

塩原 基寧(国立赤城青少年交流の家)

ササビー広場での活動を通して「36の動き」が身に付く。「体のバランスをとる」「移動する」「用具を操作する」といった動きが、夢中になること、遊びこむことで自然に身に付いていく。ササビー広場は、研修支援としてR1(オープン年)に3件、R3には8件の利用があり、また教育事業でも活用している。実際に利用した園の先生からの感想として「全身を使いながら木登りや丸太わりなど低構造でありながら充実感がある」「一つの場所でたくさんの遊びが生まれ、友だち同士で教えあったり励ましあったりしてよいかかわりがあった」「主体的に活動できてちょうどよいレベルである」と好評であり、始まったばかりの活動を、前橋市だけでなく広くたくさんの幼児に場所・きっかけを提供できたらと思っている。

(2) 「幼児期の自然とのふれあい・遊び・体験と学びの接続」

笠原 千鶴留(ときわ保育園)

コロナ禍で行った保育活動について、特に第2園庭を活用した活動に力を入れることができた。また、自然とのふれあい・遊び・体験として、国立妙高青少年自然の家での園外活動で、「自ら乗り越える力」「身体能力の高まり」「豊かな感性」が身に付いている。これらの経験が、学びの接続という面では小学校や地域の活動で卒園児が活躍する姿につながっている。16年の継続の中で保育者の変容について、まず虫に対する嫌悪感の払拭や身支度の重要性などの面から成長を感じている。そして一番実感として感じるのが、活動に対して見通しが持てるようになってきたことだ。環境に対する子供たちの体の動かし方などの見通しが持てることから、子供に任せることができるようになり、安心して子供の様子を見ることができるようになった。

2. グループディスカッション

【テーマ1】

非日常の体験が日常にどう生かされているか

【テーマ2】

自身の体験や同じ園の職員の中で、自然の家を活用して変化したこと

子供たちの中で、非日常で起きたことが日常につながっていること、子供の見方が変わったこと等多くの意見がでた。コーディネーターより、保育者の工夫が、非日常での体験の豊かさを日常につなげている役割を果たしてくれているという見解があった。

3. まとめ

今日のテーマである接続について、さまざまなことについて私たち指導者は接続の役割を担う。保育の見取りや意識の高まりが、体験活動の質が高まりを生み、より日常の保育を豊かにしていく。ときわ保育園では月1回の研修により職員の気付きを深めることが質の高まりにつながっているというお話のように、指導者の見取りの質を高めていくことが、いろいろな場面での接続を確かなものにしていくのではないかと。国立赤城青少年交流の家での事例も聞き、教育・保育の現場と施設提供の非日常の活動の連続性がより子供たちの日常を豊かにしていくことも分かった。

また、午前中の鼎談で「教えられること」と「教えられないこと」というキーワードがあり、保育・幼児教育はこの教えられない部分の耕しであることの重要性を改めて感じた。遊びの中でのさまざまな経験を通して得た感覚をもっていることが、いずれ実感を伴った知識につながっていくはずだ。幼保小の接続の場面でも生活と遊びが学びの土台になっていることを発信していきたいという意見を共有した。

小中学生期の自然や人との関わり方

【コーディネーター】小林 朋広(国立妙高青少年自然の家 所長)

【事例発表】百瀬 篤志(国立信州高遠青少年自然の家 企画指導専門職)

川口 弘泰(新潟県少年自然の家 社会教育主事)

1. 事例発表

(1)「長期キャンプの実践」

百瀬 篤志(国立信州高遠青少年自然の家)

- ・学校生活ではないところで輝ける子の活躍の場が減ってしまった。
- ・コロナの時代だからこそ、豊かな人間性を育む必要がある。
- ・仲間と協力して困難を乗り越えることで、達成感と自信を得ることができる「長期キャンプ」が、より効果的な活動だと考えられる。
- ・ボランティア育成は、ボラキャンプを経て法人ボランティアとして登録される。いろいろなキャンプに参加している様子を見ながら、信頼できるなど感じたボランティアに長期キャンプへの声を掛けている。

(2)「課題を抱える青少年を対象とした『はつらつ体験塾』」

川口 弘泰(新潟県少年自然の家)

- ・コロナ禍における活動の制限については、人数、席数、感染症対策の徹底、調理活動は簡単な調理のみ。
- ・はつらつ体験塾は必要性が高い事業である。不登校児童生徒が対象。はつらつ体験塾に登録している人は40人。「今の自分を変えたい、変わりたい、誰かとかかわりたい」と、一歩前に踏み出そうとしている子供たちの支えになりたい。目指すゴールは、子供たちの復帰。ただし参加者全員に求めている。長い目で子供たちを見守りたい。はつらつ体験塾に参加し、人とかかわり方を学んで、仲間と一緒に活動する楽しさ、大切さを実感して、成功体験を重ねて自信を付けて、最終的に社会に復帰できれば良い。一つ一つの活動を具体的にイメージして、どのタイミングでどのような対策を講じるかを検討する。
- ・鼎談を受けて、活動の質を高めるには、「たし算・ひき算」があるのでは。現在、活動が全て制限されている。ここに、何か付加価値とか、学びをプラスすることによって質が高まるのではないかと。

2. ワークショップ

必要な体験活動と体験活動の質の高め方について

- ・縦割り班活動等で今まで積み上げてきたことは大事だったのだと再確認した。
- ・私たちができる体験活動をどんどん提供していく、子供たちが選べるチャンネルを増やしていく必要がある。家庭から体験が消えていき、学校も体験のチャンスが減っていき、それを担うのが青少年施設。どんどん青少年施設が背負うおもりが増えていくと、それはそれでいけないと思う。それぞれができる体験活動があって、情報発信したり、情報提供したり、みなさんとながついていく役割を担う必要がある。
- ・親の教育、親の意識を高める。安全安心を徹底し、家族や地域からの信頼を得る。
- ・学校の中に地域の力を取り入れる。みんなに体験活動を。誰かの力を借りる。コラボする。
- ・工夫次第でやれることがある。最初の投げ方の工夫で心に火が付く。
- ・ねらいをはっきりさせること、活動を見直すことが体験活動の質を高めることにつながる。
- ・質を高めるといっても、減ってきている体験を増やした方がいい。

3. まとめ

質よりも、まずは何とか体験活動をする場、回数を増やしていかなければいけない。質というのは、その活動にねらいがあって、そのねらいを求めていければ、自然と質が高まっていくのではないかと。その際に、体験活動をすることがねらいではない。自然教室などで、体験活動をなんでもかんでも入れ込んでも、子供たちが考える暇もなく全部やっていたら、本当の体験活動・ねらいをもった体験活動にならずに終わる。欲張らずに、子供たちを自由に遊ばせたり、一つのねらいにしばらくそれが達成できるような時間を与えていく必要があるのではないかと。学校教育の力では、なかなか難しい。地域の力、NPOの力を借りていく必要がある。

総合的な学習の時間を組む時、季節感を出すこともできる。社会教育の視点に立った話合いも多くあった。

青年期における社会とのつながりー想いをカタチにする方法ー

[コーディネーター] | 渡辺 径子(上越教育大学 准教授)

[事例発表] | 加藤 清佳、加藤 みなみ(新潟青陵大学 学生ボランティアコーディネーター)

| 都築 則彦(NPO法人おりがみ 理事長)

1. 事例発表

(1) 新潟青陵大学ボランティアセンターほらくと

～私たちの想いとコロナ禍での活動～

加藤清佳・加藤みなみ(新潟青陵大学)
(学生ボランティアコーディネーター)

新型コロナウイルス感染症の流行に伴い様々な活動が制限され、これまでボランティア活動に参加することによって得ていた経験を積むことができなくなった。そして、“ほらくと”として活動してきたことによって構築してきたこれまでの繋がりや人との繋がり大切さに改めて気付くことができた。だからこそ、悲観せず、自分たちの力をつけるスキルアップの時間にしていこうと前向きに考え、オンラインでのミーティングや研修を行い、活動を継続し、歩みを止めないことを心掛けた。

具体的な活動として、大学のボランティアをテーマとした講義での実践発表や活動の協力、ほらくと研修、定例ミーティングの見直しを実施した。コロナ禍の成果として国立青少年教育振興機構令和2年度法人ボランティア表彰、2020年度新潟SDGsアワード優秀賞、活動広報紙の作成が挙げられる。

(2) 東京オリンピック・パラリンピックへの参画に向けた取組

都築 則彦(NPO法人おりがみ理事長)

2020年に東京でオリンピック・パラリンピックが開催されることが決定したことで、世界中から人・物・情報が集まり、社会が変わるといふその渦中に自分の身を置きたかった。オリンピックのボランティアをしたいと思っている人はたくさんいるのに、なれる人は限られている。オリンピックにかかわりたいと思っている人たちのパワーをうまく使えたら、社会が変わっていくのではないかと。そこで、学生が軸となり、一人でも多くの人に関われるオリンピック・パラリンピックを創ろうと、2014年に“おりがみ”は発足した。

活動の一例として、聖火を宇宙で灯そう「EarthLightProject」がある。聖火が国境を越えられなかった理由を考えることが、社会について考えていくことであり、社会とつながることそのものであるととらえている。

ボランティア活動を通して感じたことは、はじめは小さな一歩からで、その小さな一歩を踏み出すことで少しずつ素敵な世界が広がっていくことである。これからのボランティアは、社会的な役割をオーダーメイドするものにしていきたい。

2. 意見

- ・自分でやりたいことがあり、青年期の人たちは熱意をもってボランティアに取り組んでいる。青年期に社会とつながることが必要。
- ・壮年期の人たちも頑張っている姿をみせることで、よりよい社会になっていくのではないかと。できるのは、ボランティアである。
- ・はじめは小さな一歩から。そこから少しずつ素敵な世界が広がっていく。
- ・学内の学生にボランティアの魅力を伝える。コロナ禍での学びを発信することが必要。
- ・地域のボランティア「ありがとう」「前も参加してくれたよね」の一言がうれしい。自己有用感が育つ。

3. まとめ

学生ボランティアコーディネーターとして行ってきた活動が、コロナ禍で実施できなくなってしまった。しかし、自分たちのスキルアップ、顔を合わせる事、歩みを止めないことを目標に活動を続けてきた。その結果、つながりをつくっていくことが大事であることに気付いた。

自身の活動を通して、青年期の社会とつながる必要性、自分がバトンを繋ぐ意味を考えるようになった。

若い人たちの熱い想いのこもった発表を聞き、古い既存概念を取り払い、Well-beingな世界を創ってほしい。

企業による学びの応援—子供たちの未来のために—

[コーディネーター] | 中野 充 (新潟青陵大学 准教授)

[事例発表] | 鹿島 真由美 (国立妙高青少年自然の家 主任企画指導専門職)

| 増田 てつ志 (新潟県立海洋高等学校 校長)

1. 事例発表

(1) 「地域・企業とともに自然の家で

『体験の風をおこそう』

鹿島 真由美 (国立妙高青少年自然の家)

自然の家は、地域企業と連携することで、多種多様な活動を子供たちに提供している。えちごトキめき鉄道と連携した「トキ鉄でGO!」では、えちごトキめき鉄道職員による講座、雪月花の見送り、スノーシェードの見学等、企業の専門性を活かし、普段体験できないような活動を提供している。地域探究プログラムでは、地域社会の課題解決を通じた高校生の主体性や郷土愛等の育成を目指し、地元農家や鳥獣対策専門員等との連携によるフィールドワークを実施。農家との連携では、高校生たちが実際に野菜の収穫・出荷・販売を行ったり、生産者の農業への思いや後継者不足に対する不安等、生の声を聞いたりすることで、地域に密着した体験を提供することができた。また、地元材木店の端材を活用したクラフト体験の提供や無印良品での自然物を使ったクラフトブース出展等、地域企業との連携は広がりを見せている。

(2) 「アフターコロナ時代の学校」

増田 てつ志 (新潟県立海洋高等学校)

糸魚川市、企業の連携体制を強化することで、「学校で学ぶ理論」と「企業で学ぶ実践」を結びつけた、より質の高い人材育成を進めている。ICTを活用したチョウザメやノドグロの養殖、魚肉やキャビアの生産加工と商品開発、及び地元の実店舗を核としたデジタルマーケティングにおける販売実習等、地域・企業と連携した実践的な学びを提供している。また、観光資源を活かした誘客宣伝や海洋レジャー体験サービス等にもかわり、地域課題の解決に向けた取り組みを実践することで、地方創生を牽引できる人材を育成している。海洋高校は地域課題をベースに、ICTの活用やDX(デジタル技術による変革)、6次産業化等の面からカリキュラムや教育内容の刷新を行うことで、活力ある地域産業を担う海洋・水産プロフェッショナルの育成を目指す「マイスターハイスクールビジョン」というものを掲げ、学校経営を行なっている。

2. ワークショップ

* キーワードを紙に書き、一人一人感想を発表(一部抜粋)

- ・ 体験をしてみないとできるかわからないから実際にま
ずやってみることが大切。だから人には体験活動が必要
だ。また、現代社会の中で一人で生きていくことは不可
能なため、人とのつながりは必要だと感じた。
- ・ 企業との連携により、専門性をより深く学べるよさを感
じた。一人でじっくり探究していく個別最適な学びの話
もあったが、学校でも子供たちが探究心をもって学べる
体験の機会を提供していくことが大切だ。
- ・ 学校から企業へのアプローチをもっと積極的に行いた
い。企業が学校の中に入れるようにしたり、子供たちが
学校外へ行って学んだりできるようにすることで、学校
教育と社会教育とをつなぐ手立てを考えたい。

3. まとめ

数年前、コーン所属の知人が磯遊びイベントの開催に向
け、イベントの企画運営や安全管理について海洋高校から
講師を依頼された。今回の事例発表の内容ともつながり、専
門性をとても学んでいて大学も見習う必要があると感じ
た。せっかく企業と連携しても、中途半端なことをしては個
別最適な学びにはならない。AIは事例が集まっているもの
に関しては人間よりも優れているが、自然体験がもたらす
想像性や個性、感性の発達は人間にしか味わうことができ
ない。改めて、教えられることと教えられないことについて
考えさせられた。また、企業とつながる時に大切なのは、
パッションをもった人同士の熱意の伝わり合いやスピード
感、良好な関係性をいかに構築していくかということであ
る。あるアウトドア関連企業では「キャンプをしたことがあ
る、好きである」という条件に当てはまらなければ雇わな
い方針をとっている。ブランド力がある企業は、利益追求だ
けではなく、目指すべきところや精神論的なところを重視し
ている。私たちは、対象年齢に応じ、子供と専門性とのマッ
チングを考えたり、場や機会の提供を考えたりしなければ
ならない。本物の体験を今後も地道に追求していくことが
大切である。企業と連携し、「本物の体験」をすることがとて
も重要である。

全体講評

推進委員長 明石 要一(千葉敬愛短期大学 学長)

- どの分科会でも「つながり」を大切にしていた。幼児と小学校、施設と企業、学校と企業、大学と大学等、社会教育も単体で実施することが難しくなっている。それぞれの特性や長所を認識しながら、つながっていくことが必要である。
- 体験をただ単に行えばいいのではなく、「体験の質を重視する」ことが必要である。体験の深みについて考える時期にきている。
- 体験を通して、mission、passionを育成してほしい。mission、passionは、体験からしか生まれえない。
- 我々が提供できる体験は非日常的なものが多いが、参加者が体験を通じて非日常と日常を結びつけることが重要である。プログラム提供者は、どのような働きかけが非日常と日常を結びつけることにつながるか、検討していく必要がある。
- 体験の質を高めるために、子供たちの遊びを豊かにすることが必要だ。昔の遊びを見直し、基礎的な場面をつくるのも青少年教育施設の役割と考える。遊び用具を設置したり、つくったりすることも試みてほしい。

参加者によるアンケート結果

- アンケート項目として掲げた事業内容(事業全体、プログラム、実施時期、運営、職員対応)、鼎談、分科会の全項目が100%肯定的評価(満足、やや満足)であった。
- 「みんなで知恵を出し合い、新しい活動を作り出すチャンスである。」「体験格差を無くす取組を知りたい。」「生活様式や家族一人一人の過ごし方が変わり、意図的に仕組まなければならない。」など、参加者による今後の体験活動の展望や希望の声がかがえた。



成果と課題

[成果]

- オンラインによる同時配信などを行うことで、新潟県内だけでなく、全国から参加者を集めることができた。
- 個別最適化を意識した体験、年中行事、体験格差の解消、ICTの活用など、withコロナ時代を意識した視点から質の高い体験活動を検討できた。
- 青少年教育に携わる様々な機関や立場の方が参加し、分科会で課題や今後の方向性について意見交換する中で、連携して体験活動することにつながる場となった。
- コロナ禍においての体験活動の提供方法について具体的な事例を聞くことができ、自施設でも参考にしたい等の感想があった。

[今後の課題]

- 鼎談のみをオンライン配信としたが、分科会の配信希望も多かった。今後は、複数配信できるようにICT機器を準備する必要がある。
- 事業の募集・広報機関が1ヶ月程度しかなかったため、早めに広報をする必要がある。
- フォーラムの成果が広く全国に伝わり、コロナ禍においてもニーズに応じた青少年の体験活動を推進できるように、報告書の配布やWebを活用した成果の配信を工夫していく。

推進委員会

委員長／明石 要一(千葉敬愛短期大学 学長)

委員／小菅 江美(NPO法人緑とくらしの学校 理事長)

委員／小林 智(新潟県教育庁生涯学習推進課 課長)

委員／中野 充(新潟青陵大学 准教授)

委員／小林 朋広(国立妙高青少年自然の家 所長)

*事務局

【令和3年度】

文部科学省委託事業「体験活動等を通じた青少年自立支援プロジェクト」

全国青少年体験活動推進フォーラム

報告書

発行 令和4年2月



独立行政法人国立青少年教育振興機構

国立妙高青少年自然の家

〒949-2235新潟県妙高市大字関山6323-2

TEL:0255-82-4321 FAX:0255-82-4325